

---

# 純情ロールケーキ

蝶野夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

純情ロールケーキ

### 【Nコード】

N3823W

### 【作者名】

蝶野夜

### 【あらすじ】

賄賂はロールケーキ一本。違うクラスの委員長達から全く関係のない玉城楓が頼まれたのは留年した不良遊佐武瑠を授業に出るように説得すること。

“白虎”と呼ばれる遊佐は意外に怖くなくて、でも、何だか訳ありで……毎日学校に来て屋上にいる理由は何？

自サイトで短編として掲載したものの連載版です。

## 屋上は虎の住み処

本日、快晴。

窓の向こうは憎らしいぐらいの晴天。

雲のない空、でも、私の心は曇天。

ああ、憎い。何が憎いのかわからないくらいに。

ゆつくりと上がる階段。

このまま辿り着かなければいい。

一段昇ることに思ってる。

最後の一段、隔てる扉、その向こう……

鍵がかかっていればいい。そう思って、ノブを回せば、開いていく。

次に思うことは、誰もいなければいい、で

扉を開けて、初めて踏み込んだ屋上という立ち入り禁止領域。

飛び込んで来る蒼穹、でも、私の頭上には積乱雲があるみたい。

願いも虚しく、人がいる匂いがした。立ち上る紫煙、嫌いな臭い。でも、ここまで来たら引き下がれなくて。

さつきから同じ映像が頭の中でリピートしてるから。

だから、もう私はその人の前に立って、ここに来る間に何度も考えた台詞を言うしかなかった。

そこにいたのは金髪、脱色しきつた白っぽい金髪。

座り込んでつまらなそうに煙草を吸っている。

正面に立った私を見上げる目は、獣のようにぎらついて見えた。けれど、それはすぐに驚いたように見開かれた。

「お前、何で……」

乱暴にイヤホンを外して、心底、驚いたようにその声は吐き出された。煙草がぼろりと落ちそうになるくらい。

何をそんなに驚くことがあるのかわからない。

ここは彼の縄張り、そう聞いている。だから、他の人間は踏み込まないって。

私は踏み込んでしまったけど、それはそんなに驚くこと？

「二年A組、遊佐武瑠さんゆさたけるですよね？」

特徴は一致してるけど、念の為に確認する。

私は間違いなく遂行しなければならないから。

「あー、そうだけど？」

ニコニコと遊佐さんは笑う。どこか楽しそうに、嬉しそうに。

「私は二年F組、玉城楓たまぎかえでです」

まずは礼儀として名乗ったけど、遊佐さんは声を上げて笑った。

「堅苦しーのはいーよ、楓ちゃん」

「はあ……」

いや、何で、いきなり名前で呼ばれているのか。

遊佐さんってそういう人？

想像と、ちよつと雰囲気が違う。

でも、それでも私はやらなきゃ。やるしか……！

「それでは、遊佐さん」

「だから、堅いつて。武瑠でいーって」

本題に入ろうとしたら、遊佐さんが文句を言ってきた。

いや、だから、こういう人だっけ？

ダメ、惑わされるな、流されるな。私はやれる。

「単刀直入に言います」

「うん、いーよ」

息を吸い込んで、はっきりと聞こえるように言えば、遊佐さんは笑顔で頷いて……

何か頭の中の遊佐武瑠像と激しく食い違ってる。物凄く感じが良  
い。

でも、遊佐さんは不意に考える仕草を見せた。

「いや、やっぱり、待って」

「はい？」

何だろう？

心の準備が必要なのか。

「こういうのは俺の方から言っただ方がいーよな？」

「いえ、あの」

いや、どうということなんでしょう？

私の言いたいことはわかって、先手を打つつもりなのか。

「来いよ」

一瞬、言われた意味がわからなかった。

「見上げるより、見下ろす方が好きなんだ」

遊佐さんは笑う。

遊佐さんは座っていて、私は少し離れて、正面に立っていて……

「同じ高さで話さないのは駄目ですね。失礼しました」  
「もっと近くに来て」

誠意の問題だと思って、その場に座ったけど、遊佐さんは更に要求してくる。

いや、これ以上はちょっと近すぎないですか？  
煙草の臭いがちよっときつい。

「照れんじゃねーよ。ここまで来れたじゃねーか」

照れてません。照れてないんですけど？  
もしかして、遊佐さん、何か勘違いしてます？  
いや、まさか、何を……？

「ああ、やっぱり、俺から行く方がいいーか」

だから、さつきから何なんですか！  
この際、一致しない遊佐武瑠像はどうだっていい。  
私の目的はただ一つ、その達成の為には決して流されないこと！

「授業に出て下さい！」

私の目的、それは遊佐武瑠に授業を受けさせること。  
ただ、それだけ。  
たった、それだけ。

「は？」

「お願いですから、もう授業をサボらないって誓って下さい！」

遊佐さんは変な顔したけど、無視。

この人はサボり魔っていうか、学校には毎日来てるけど、全然授業に出てないらしい。理由は不明。

「……ああ、一緒に卒業できねーとだせーしな」

少し考える素振りを見せた後、遊佐さんは言った。

一緒に卒業……誰か二年に友達でもいるのか。だって、元同級生とはもう一緒に卒業不可能だし。

ちなみにこの遊佐さんは留年生。理由は病気じゃないってことくらいしか知らない。

「授業に出てくれますね？」

「やっぱ出る気しねーや。クラスちげーし」

簡単に済んだと安堵したのも束の間、打ち砕かれた。

さっきのって、考え直したって答えじゃなかったの？

「授業受けて下さい！」

やっぱり、私って適任じゃない。

そう思うけど、こうなったら強引に押し通すしかない。

「どうせ、誰も出てほしくねーだろ。俺は厄介もんだ」

遊佐さんは言うけど、そんなの私にはわからない。

「出てほしいから、こうして私が来ているんです！」

学校に来ているのに、授業には出ないなんて絶対、変！

一日の大半をここで過ごすのも絶対、変！

「何でそんなに必死なんだ？」

遊佐さんが不思議そうに言う。

そう私は必死、死ぬ気で遊佐さんに挑んでいるつもり。

「遊佐さんが授業に出てくれないと私はあの忌々しいロールケーキ代をお財布からグッバイさせなきゃいけないんです。切実なんです！」

そう、ただでさえ少ない私のお小遣いが今、飛び立とうとしているわけで、それを引き留める為には遊佐さんに授業に出てもらうしかないわけで。

「いや、話見えなくなっただけだよ」

遊佐さんが変な顔をする。

そうでしょうとも。私だってよくわからないんだから。

「私は遊佐さんのクラスの委員長と副委員長に、遊佐さんを授業に出すっていう約束をさせられているんです。半ば脅しです」

遊佐さんと私のクラスは端と端、私は何委員でもないのに、要するに誰もやりたがらない雑用をやらされている。脅されて泣く泣く。

「ロールケーキって何だよ？」

「はなから私が動かないと踏んだ清い交際と見せかけて実は超極悪な優等生カップルが私の親友に賄賂を送ったんです。一本二千百円のロールケーキを丸ごと」

思い出すだけで腹が立つ、本当に。

そんな一本二千百円のロールケーキを買うお金があるなら、もっと形のあるものを買いでもいいのに。

「彼女は私の口に無理矢理一口押し込むと後は一本丸呑みって感じで、あっという間に食べてしまったんです」

あの早業はきつと証拠隠滅だったんだと思う。

当事者の記憶には、もう二度と離れないくらいガッツリ焼き付いたけど。

「食い意地張ったダチを持つと苦労するもんだな」

遊佐さんは他人事だからって笑っているけれど、思い出すだけで恐ろしい。

笑いごとじゃない。校内で優等生のフリした悪魔のカップルが罪のない女子の親友を買収し、親友もそれに乗ったわけで……そりゃあ、もうノリノリで。

ただごとじゃない。

「とにかく、私は大嫌いなロールケーキを食べさせられた上に全く縁のないクラス委員の手伝いをさせられるんです」

女の子がスイーツなら何でも好きだと思ったら大間違い。全く嫌  
いってわけじゃないけど、スポンジと生クリームが嫌。

適任というか、それをやるべき人は他にいるはずなのに、私が何  
でこんな目に遭わなければならないのか。

「だから、授業に出て下さい！」

もう一度、勇気を振り絞って、誠意を込めてお願いする。

「そーゆーことなら断る」

「そんな……」

あっさり、撃沈。

しっかり断られてしまった。

「俺を恨むなよ」

遊佐さんは言うけど、そんなこと微塵も考えてなかった。

「わかってます。私が恨んでるのはあの三人です。でも、絶対に勝  
てないのはわかってるんです」

「ダチだから？」

友達だから許せるということは今回には当てはまらない。多分、  
私の心はそんなに広くない。

「友達は優香だけです。委員長達なんて今まで話したこともなかつ  
たんです」

そう、関与してる友達是一人だけ。親友の優香だけ。委員長も副委員長も全然知らなかった人。

「なら、何で俺と全く接点のないお前が来るんだ？」

「ご尤もな質問でしょう。」

私も真っ先に疑問に思ったし。

「聞きます？ 長い話になりますけど」

それは、短いようで長い話。少なくとも、一言じゃ無理。

「暇潰しにはなんだろ」

湯佐さんは言うけど、本当に話していいのかな？ 私的につて言うよりは遊佐さんの。

「不愉快な話になると思いますけど……」

どうしても、話をする上で端折れない部分に多いに問題がある。

「ああ……構わねえよ。今更、何言われてもどうってことねえし」

遊佐さんは悟ったみたいだったけど、すぐに私を見た。

その目に促されるように、私は事情を説明するしかなかった。そうそれは遡ること、数時間前……

## 賄賂はロールケーキで（回想1）

私と親友瀬山優香せやまゆうかの登校時間は早い。

電車が空いてる内に学校にきて、いっぱい話をする。

だって、丁度良い時間って凄く混むんだよね。案外本数ないし。

今日もそうして、まだ人影の少ない教室で色々話をしようとしていた時だった。

「玉城楓さんよね？」

「そうだけど……」

声をかけられて、振り向けば見たことあるような、ないような……な女子。

あれ、後ろに誰がいる？

「あつれー？ A組委員長が楓に何の用？ しかも、副委員長っていうか、彼氏付きで」

優香は何だか知り合いみたいだった。

優香の交友関係って、親友の私でもよくわからないところがある。

「瀬山さん、あなたも一緒に聞いて欲しい話があるの」

「ふうん……あたし、これから楓とお話アースド朝食タイムだから、忙しいの。残念！ バイバイ！ 出直さなくていいからね！」

何か、ちょっと嫌な予感。

聞きたくない感じ……と思ったら、優香がはつきり言ってくれた。優香はいつも学校で私と話しながら朝ご飯を食べるから。

優香の食事の時間を邪魔すると大変なことになるのは、結構有名

な話。

優香自体がちょっとした有名人だから。

「その、デザートになるかわからないけど、良かったら、これ、食べよ」

委員長が出したのは紙袋、その中から長細い箱が出てきて、優香はすぐさま開けた。

中にいたのはロールケーキ。

よく見るとこの紙袋って結構高いお店のだったような……

「へえ、気が利くじゃん。まあ、話聞き代にはなるから座りなよ」

しっかりとロールケーキを確保して、優香は二人を空いてる席に促しちゃった。

現金なのはわかってたけど、聞きたくないかも……

だって、面倒臭そうな話は私に向けられてるっぽいから。

恨みがましく視線を送っても、何か予定通りに巨大なおにぎりに齧り付き始めたし。

「私たちは玉城さんをお願いがあつて来たの」

「私に……？」

うわっ、本当に嫌な予感がする。

何か人違いじゃないかかと思いたいけど、最初から名指しだったし……

「そう、君にうちのクラスの問題を一つ解決してもらいたいんだ」

副委員長の方が言う。

凄く真面目な感じで、ちょっと苦手な雰囲気……

「うちのクラスの問題、ねえ……訳ありって感じだねえ」

私の気持ちを優香が代弁してくれた。優香は思ったことを口に出せるし。

結構、優香なら何でも許されるってところがある。

「実は、うちのクラスに遊佐君っていう人がいるんだけど……」

今度は委員長が切り出す。

ユサ、君……聞いたことないかも。

でも、優香は違ったみたい。

「あの“白虎”遊佐武瑠しかいないよね？」

「そう、彼、留年してしまって、うちのクラスに入ったのだけど、一度も授業に出ていないの」

そう言えば、二人くらい留年した人がいるとか言ってたっけ……うちのクラスにはいないけど。

「その彼が授業に出るように説得してほしいんだ」

「普通さあ、そーゆーのは、委員長の仕事でしょーが」

優香の言う通りだと思って私も頷く。

だって、私はF組だし、端から端で、全然関係ないわけで。そうしたら、委員長がシユンと俯いた。

「そう、本当は私が先生に頼まれたことなの、でも……」

「遊佐って男は危険すぎる！うちの嫁にもしものことがあったら

どうする!？」

くわっ、と目を見開いて副委員長が言う。

この人、こんなキアラなの？

正直、ちよつと引いた。うつん、ちよつとじゃない。ドン引き。

「こんな色気も何もない地味女、よほどのケダモノがどーしよもなく飢えてるわけじゃない限り『勘弁してくれー!』って感じたと思うけど」

本人を目の前にして優香はとんでもないこと言った。

「き、貴様あ！俺の嫁に向かつて……!」

「楓の方が断然可愛いんだから危ないでしょーが！あんたの地味嫁には、もしものことがあっちゃいけなくて、あたしのキュートな楓があんなことや、こんなことになっても、いいって言っの!？」

優香さん？

私、そんなに可愛くないよ？

って言うか、何、この言い合い。

「正直、俺は全く構わない。むしろ、そうなってくれた方がすつきりする。許されるならば、是非とも、ケダモノの前に放り投げたいと思っっている」

私、可愛くないけど、これはひどいと思う。

うつん、ひどすぎる！

「うつわ、副委員長ってやっぱ噂に違わぬ二重人格だよねえ」

うん、何か予想外の性格。どんどん好感度が下がってる感じ。できれば、これっきり関わらない方が幸せだと思う。

「あ、あの、私、あなたに何かした？」

「いや、何も？」

恐る恐る聞いたら、この反応。

何も、って感じじゃない。

やっぱり、何かしちやったのかな？

この人、本当に全然知らないけど。

「こんな奴、ほっといいていいよ。こいつ、真面目なフリして、性格めっちゃくちや歪んでるから」

うん、そうさせていただきます、優香様。

私には彼のこと全然わかりません。

「大体、委員長がダメなら副委員長が行けばいいでしょ？ 何のための副委員長なの？」

その通りだと思う。

でも、彼を見たらプルプル震えていて……

「む、婿に行けない身体になったらどうしてくれる！？ 目が合ったら最後、病院送りだぞ！？」

「それはそれは、是非とも、猛獣の前に放り投げてやりたいね。あんたなんか掘られてしまえ。楓もそうなってくれた方がすっきりするよね？」

いやいや、私に同意を求められても困るから！

「ぐっ……やはり、瀬山は手強いか……」

うん、この瀬山優香様に勝てる人なんてほとんどいないと思う。

「他のクラス委員さんとかにも頼んでみたのだけど、みんなに断られてしまっ……」

「そりゃあ、お断りするでしょうよ。何せ、相手は“星高の白い虎”だもん」

それは一体、どういうことでしょう？

白虎とか、白い虎とか……あれ？ 一緒？

「風紀にも頼んではみたが……」

「あーダメダメ、無駄なことしたね」

風紀の何が無駄なの？

「でも、風紀委員の仕事じゃないの？」

「あのねえ、楓、うちのクラスの風紀委員は誰でしょう？」

「あっ……あの怖い二人」

「そうそう、うちのクラスの代表的不良にして、学年でも筆頭に数えられる由緒正しい不良さんですよ。頭にハンバーグ乗せた感じの人達」

「でも、他の人は……」

いや、あの二人がダメでも他はちゃんと活動してるはず！

「あんたさ、風紀が活動してるの見たことある？」

「見えないところで活動してるのかも……」

「残念ながら、形だけだ。どのクラスからの選りすぐりの不良が集まっている」

うわっ、風紀委員会って不良委員会だったんだ。確かに一番楽な委員会って噂はあったけど……。

「じゃあ、生徒会は？」

風紀がダメならここしかないと思う。

「あの生徒会が助けてくれるわけないでしょ。今、正にその風紀委員会を肅正しようって猫様が大忙しなんだから」

優香は生徒会が嫌いらしい。と言うか、いつも生徒会長の南城稜<sup>なんじょう</sup>己先輩<sup>すき</sup>を胡散臭<sup>ずさん</sup>いつて言ってる。良い人なのに。

“猫様”こと白河寧々子先輩<sup>しろかわねね</sup>（通称：ネコちゃん）だっていい人だし。

「で、でも、天真君<sup>てんま</sup>なら……あつ、私が天真君にお願いすればいいの？」

天真君なら、きっと何とかしてくれるはず。

そっか、そういうことが。

じゃなきゃ、私が頼まれるはずなんてないよね。

「天真君？」

あれ、委員長が首傾げてる？

「生徒会副会長の結城天真<sup>ゆづき</sup>さん、楓の幼馴染み」

「そ、そんなこと知らなかったわ！ 知ってた？」

「い、いや……」

副委員長も首を横に振って……あれ？

「え、じゃあ、何で私なの？」

不思議すぎる。そういうコネしか私にはないんだけど……

「君が結城副会長殿と仲が良いとしても生徒会は動かないだろう」

「そうだよねえ。結城さん、楓には甘いけど、今回ばかりはヒーローも出れないねえ」

天真君はいつも優しく、確かに私にとってヒーローだったんだと思う。いつまでも甘えてちゃダメだとはわかってるけど、やっぱり今回は天真君の仕事だと思う。

## 実は極悪カップル（回想2）

「それで？」

「玉城楓、君は常に十位以内に入る優秀な生徒だ」

優香が促すと、副委員長がじっと私を見てきた。

いや、それほどでも……

「遊佐には補習も必要になる。君は部活動にも入っていないようにだし、塾にも行っていないければ、アルバイトもしていない、要するに暇人だろう？ そんな暇な優等生は君くらいしかない」

ひ、暇人？

今、この人、私のこと、暇人って言った？

「暇じゃない！ 帰ったらテレビをいっぱい見るの！

「それを暇人だって言うんだ！」

カッチーン。

何で、今日、初めて話すような人に暇人とか、言われなきゃいけないの！？

「あんた、楓の趣味馬鹿にしていると、痛い目に遭うよ？」

「いいや、塾に通う僕たちからしたら十分に暇人だ！ 実にたるんでいる！」

「うつ……テレビから学ぶことはいっぱいあるの！」

アニメもドラマもバラエティだって大好き、ニュースだって見れば、誰との話題にも困りません！

結構誰とでも何かしら話を合わせられる自信はあるのです！

「聞いた話によると、君は実に低俗なDVDばかり購入しているらしいじゃないか」

「低俗？」

委員長が首を傾げる。

うん、でも、私は副委員長が言いたいことがわかってしまった。

「B級洋画馬鹿にすんな！」

この際、何で副委員長が、私がB級洋画のDVDを買い集めていることを知ってるのかはどうでもいい。

「下品な言葉を使つて、何でも破壊すればいいと思つてる、これを低俗と言わずとして何と言うか！」

聞き捨てならない！

「破壊の美学がお前なんかにわかるか！」

「わかりたくもない！ あんなものばかり見ていては、いつか犯罪を起こすんじゃないのか？」

「非現実的なワイヤーアクション、銃撃戦、カーチェイス、派手な爆破にムキムキマッチョ！」

惜しげもなく莫大な制作費を使ったのに、あんまりヒットしなかった感が最高なのに！

「あんたさ、頼む気あんの？ ないの？ 楓に喧嘩売りにきたの？」

そつだよ。私、お願いされてたはずなのに！

「玉城さん、ごめんね？　でも、もう玉城さんしか頼れる人がいないの」

「少し言い過ぎた。是非、お詫びにそのロールケーキを食べてくれたまえ。君の為に買ってきたんだ」

委員長は申し訳なさそうにしてるけど、副委員長にはやっぱり喧嘩を売られてると思えない。

「副委員長さ、本当は嫌がらせに来たんじゃないのお？」

優香様の言う通りにございます。

「嫌がらせに一本二千円もするロールケーキなんか買うか！」

やっぱり、ここのお店高いんだ……うげっ、ケーキに二千円とかありえない。

「つまり、それが自分達を守る値段ってわけ。随分とお安い体だね」

「好きなだけ食べていいのよ？　丸かじりしてもいいわ。私も昔っからロールケーキを一本豪快に食べてみたいなんて思ってたの

玉城さん？」

「……ロールケーキ、嫌い」

「は？」

「私はロールケーキが大っ嫌いなの！」

ロールケーキなんて大嫌い！

こんなもの朝っぱらから出てきたあげくに、一本丸かじりが夢なんてどうかしてる！

「リサーチ不足だったねえ」

「なっ……ケーキが嫌いな女の子なんているはずがないわ!」

委員長さんは言うけど、いるはずないなんてことはない。

「残念、ここにいる玉城楓嬢はケーキ嫌いのありえない女子高生なわけ」

そうここにいらつしやるわけですよ。ケーキ嫌いのありえない女子高生が。

ロールケーキに限らずケーキが嫌い。何が嫌いかと言われればふわふわのスポンジと生クリームが。

「そんな……」

「本当に頼む! 君しか頼れないんだ!」

「今度は好きな物御馳走するからお願い!」

何で、この人たちはこんなにも必死なんだろう。

「一応、わざわざ、こんな賄賂まで買ってきてお願いしてるわけだから、聞いてあげよっか?」

優香さん、あなた、ロールケーキ食べるつもりですね?

もう貰ったものだから、食べるつもりでしょ?

自分の胃袋に納める気満々ですよね?

そういうオーラ出てますから!

「遊佐さんってどういう人なの?」

「ゆ、遊佐君は……」

優香のオーラに圧されて聞いてみたら、委員長が口ごもった。

「知らないって正直に言っちゃえば？　だって、あの人、全然授業出てないし」

「君の方がよく知ってそうじゃないか」

二年F組広報部（実際そんな部はないんだけど）の優香様に、何と愚かな……！

この人は超広域のアンテナ持ってるんですよ。  
おまけにスピーカーっていう人種。この人に秘密を知られたらどうなるかわからないって言われてるぐらい。

「まあ、あたしはね。でも、悪い噂は委員長たちもいっぱい知ってるよね？」

「い、いや、まさか、そんな……」

悪い、噂？

「正直に言った方がいいんじゃない？　後から契約違反だってあたしが煽って吹っかけちゃうかもしれないから」

怖い！

味方のはずなのに、私でも時々優香が怖くなる。それはとっても頼もしいってことでもあるんだけど。

「……………」  
「……………」

黙り込む委員長と副委員長。まあ、無理もない。絶対に何があつ

ても味方宣言をされてる私だって怖いんだから。

「じゃあ、あたしが言おう。遊佐武瑠、十八歳、白っぽい金髪に獣のような目つきの、通称……」

きつと、今、優香の頭の中では、その遊佐さんのファイルが開かれているんだろう。

すると、二人は慌て始めた。

「か、彼は留年して、うちのクラスになったんだ」

副委員長が慌てて話し始めたけど、それはさっきも聞いた。

「そのダブりの理由ってのがさあ」

「びよ、病気とかじゃないんだけどね……」

すかさず、口を挟んだ優香に今度は委員長が大慌て。

そりゃあ、病気じゃないでしょう。

何だかよくわからないけど、虎とか呼ばれてる人なんて、怖いに決まってる

「それで、一度も授業に出てきたことがないんだよね？」

「学校には来てて、いつも立ち入り禁止のはずの屋上にいるらしいのだけど……」

学校には、来てるんだ……しかも、屋上。不良の聖域的な？

「って、それだけ？」

全然、詳しい話じゃない。結局、最初に聞いたことの繰り返し。

不都合な事実を耳に入れたくないっていうのが、見え見え。

「じゃあ、彼のわっするーい噂の数々、聞いちゃう？」

優香がニヤツと笑って、委員長と副委員長の顔色が悪くなる。  
聞いちゃったら、断られるのがわかってるんだ。

「まあ、いじめるのはここまでにして、折角賄賂まで持ってきたんだから引き受けちゃえば？」

何をおっしゃいます、優香さん。

さっきは私の身を案じてくれたじゃない！  
しつかり、ロールケーキ持ちっちゃってさ！

「でも、受け取ってむぐっ……」

私は受け取ってない。

私は受け取って……

「はい、一口受け取った」

うえっ、気持ち悪っ。私は優香のペットボトルのお茶を奪い取って一気に流し込む。

じゅっくん。

「優香こそ私をいじめたいの！？」

「大丈夫大丈夫、楓ならできるって」

いや、何、その根拠。さっきはあれだけ私を守ろうとしてくれたじゃない！

「そういつわけでこの件はこの瀬山優香が責任もって玉城楓に遂行させます故……いったきまーす！」

わしつと、優香は両手でロールケーキを掴んで、大きな口を開けた。

「わ、ワイルド……」

「君の口はブラックホールか……」

委員長も副委員長も啞然としてる。

あつと言つ間にロールケーキは優香の中の宇宙に消えていった。そう、こんな時間からロールケーキ一本消失させられるのは優香しかない。

「じゃあ、玉城さん、お願いね？」

「頼んだぞ、玉城楓」

二人は笑顔で、絶対に断れない空気を感じたわけで……  
まあ、適当にやるしかないか。

「ああ、そうだ。もう君しかないと思っているわけだが、君が失敗した時には……ロールケーキ代を請求するとうるか」

お、鬼！

一本二千円もするロールケーキ買つくらいなら、DVD買つもん！

「まあ、昼休みにでも行つておいでよ」

こんな無責任なことを優香に言われちゃったりして、今に至る、

みたいな？

まあ、まったりお昼を食べて、どうにか逃げようと思ってたら全部見透かされて、追い出されたんだけど。

## 懐柔されそうな飼育係

暴言の数々を思い返しつつ、遊佐さんにはざっくり説明するわけだ。

「本当は委員長が先生から頼まれたらしいですけど、副委員長が自分の嫁が傷物になったらどうするんだって大反対して、副委員長は婿に行けない体にはなりたくないって言って、他のクラス委員にも頼んで回ったらしいんですけど、関係ないって断られて、風紀は論外で、生徒会も介入しないしで……何か私が暇人だかららしいです」

話をまとめるとそういうこと。多分。

「お前、お人好しだからな」

「え？」

「そーゆー顔してるって話だ」

びっくりした。

遊佐さんが私が散々優香にお人好しって言われてることを知ってるはずがないよね。

そりゃあ、私は優香みたいにはつきり言えないし、断れないけどさ。それ、思いっきり顔に出ちゃってたんだ……

「つーか、俺を何だと思ってるんだっつー話だよな」

いや、“白虎”なんじゃないですかね？

“星高の白い虎”を略して“白虎”なのかな？

よくわからないけど、危険人物って言うか、猛獣扱いだったのは確か。

まあ、そんなに危険な感じじゃないし、やっぱり噂ってあてにならないのかな？

「副委員長は自分の彼女が傷物になったら困るけど、他の女はどうでもいいとか言っんですよ？ あの人、相当性格悪いですよ。本性は最悪です。何か私が悪いことしたのか、嫌われてるんです。物凄く。全然知らない人なのに」

全然接点がなかったはずなのに、どうしてあんなに嫌われてるのがわからない。

「気にする必要もねーだろ。所詮、小者だ」  
「そうですね」

まあ、別に気にはしてないけど……ちょっとむかつくだけで。

「じゃあ、授業に出て下さいね」  
「余計出たくなかった」  
「そんな……！」

普通、『じゃあ、喜んで』なんて言ってくれないとは思うけど……このまま、引き下がったらあの性悪眼鏡が何て言うか、考えたくない。

ロールケーキ代は絶対に払いたくないし。大体、朝っぱらからあんなもの持ってくる方がどうかしてるし、絶対優香を釣るつもりだったんだ。初めから。

「また、来いよ。いつも、ここにいつから」

遊佐さんが笑った。

いや、いつも、ここにいられちゃ困るんですよ？

「正直、もう二度と来たくないんですけど」

「ああ？」

思わず本音が出ちゃったら睨まれた。

やっぱり、“白虎”とか言われてるらしい遊佐さんの睨みは超恐い。

「何でも一発で解決するわけじゃねーんだ。そんなに授業に出てほしけりや必死に説得してみろよ。そうしたら、俺だって心変わりすっかもしんねえぜ？」

凄く正しいことを言ってるような気はするんだけど、でも、何か違う。

「じゃあな、楓ちゃん。俺、待ってるから」

予鈴が鳴ってしまつて、タイムリミットだと言つように、遊佐さんがひらひらと手を振る。

このまま午後の授業をサボって説得を続けても無駄だと思う。そこまですけないし、渋々私は引き下がることにした。

やっぱり、今日が晴天なんて嘘。

どんより曇り空、雨雲。

濡れているところにいつも雨が降る。

きつと、私が立っているのは多分そうつところ。

そうして、遊佐さんと私の戦いの日々は始まったのだった……

と思ったら、二度目は恐ろしいほど早く訪れた。  
放課後、私はもう一度優香に送り込まれたわけで。

「もう二度と来たくないんじゃないの？ それとも、もう俺が恋しくなった？」

遊佐さんは笑う。何がそんなに面白いんだろう。

私は今豪雨のまっただ中って感じなのに。先が全然見えないのに。

「どうした？」

「あの後帰ったら、友達にいきなり消臭スプレー噴射されました」

「ヤニ臭えって？」

優香は容赦ない。一体、どこにあんなものを隠し持ってたんだろ  
う。

「楓ちゃんも煙草嫌い？」

「……嫌いです。大体、遊佐さん、未成年じゃないですか」

親も吸わないし、昔から煙草って苦手。本当にあの煙、嫌。

「だから、かてーって。俺、先輩じゃねえし。まあ、タメでもねー  
けどな」

優香、私には遊佐さんとの接し方がわからないよ。先輩じゃない  
からさん付けだし、敬語の方がいい気がするし……

「それとも、俺が怖いか？」

本人を目の前に怖いと言えるわけじゃないじゃないですか！  
いや、でも。

「噂の遊佐さんは凄く怖いと思いました。でも、今、目の前にいる遊佐さんは怖くないんです」

あの後、本人に会ったんだから、って優香は噂の数々を教えてくれた。

“星高の白い虎” または“白虎”、目が合ったら最後、病院に送られるとか、他の学校の不良を半殺しにしたとか、大体同じ感じの噂。

よくある感じだけど、優香が言うには真実も多々混じってるとか……。

優香が言うなら、かなり信憑性は高いはずなのに、遊佐さんは怖くない。なぜ？

睨まれたりするとちょっと怖いけど、でも、剥き出しのナイフみたいな感じじゃなくて……

「ま、いいや。その遊佐さんってのもなかなか……」

遊佐さんは一人でニヤニヤしてる。一体、どうしたんだろう……。でも、触れちゃいけない気がする。

あ……面倒臭い話題に触れなきゃいけないんだった。

「言い忘れてましたけど、遊佐さんは補習も必要なんです」「めんどくせー」

本当に遊佐さんは面倒臭そう。私だって面倒臭いし。

「私は遊佐さんの補習係でもあるんです」

「別に、俺なんかのために楓ちゃん的时间使う必要ねえだろ」

「でも、私の時間の価値なんか二千元程度らしいですよ」

「随分とロールケーキを根に持つてるんだな」

そりゃあ、根に持たない人なんていないと思う。

私には何の得もないんだし。

「まずは補習からでもいいですから！」

授業に出たくないなら、せめて補習からでも。とにかく遊佐さんには一步を踏み出してもらわなきゃいけないわけで。

「俺、もう帰るけど、一緒に帰るか？」

無視された。

「遊佐さん、補習は……？」

「何か奢ってやろうか？」

また無視ですか。

「奢らなくていいですから、学業を……」

「じゃあ、映画でも観るか？」

「映画……」

ぴくりと楓センサーが反応してしまった。

「今、何か面白そうなのやってたよな？　すげーアクションの」

絶対、あれだ。今、CMでやってる派手な演出の話題作！

「遊佐さんの奢りですか？」

「そりゃあ、勿論。行くか？」

学校帰りに、それも見たかった映画を、しかも、他人のお金で見れるなんて……！

食べれないロールケーキよりも、ずっとずっと価値がある。

思わず、頷きそうになったところで、止まる。私の中の理性はまだ残っていた。

「……だ、ダメです！ 私は買収されませんからね！」

「いーじゃねーか、これから長い付き合いになるんだ」

「な、長い付き合いって何ですか！ 長期戦宣言ですか？」

長引かせるなんて絶対嫌だ。

「詫びだよ、詫び」

「そういうことは授業に出てから言ってください！」

「授業に出たら、お前を映画に誘ってもいいのか？」

「そりゃあ、私でよければいくらでも映画観ますよ？」

遊佐さんが考え込むような仕草を見せた。よし、ここで押しの一言！

「だから、授業に出てください」

「嫌だ」

撃沈。楓号沈没にございます。もう難破船だよ。元々、オンボロ。

優香なんて豪華客船っていうか、軍艦なんだろうな……

「だったら、何で、学校に来てるんですか？」

遊佐さんがじーっと私を見た気がした。

「何でだろうな」

そうやって、はぐらかして遊佐さんは鞆を掴んで立ち上がる。

「帰らねえの？」

「補習……」

帰る前にちょっとでも、と思ったのにやっぱり無駄っぽい。

「まあ、今日はいいいじゃねえか。送ってってやるよ」

「映画は行きません」

「わーってるって」

本当にわかってるのかな？ この人。

そんな感じで一日目はミッション失敗。

## 虎の餌付け開始

一体、いつまでに遊佐さんを授業に出させればいいのかは聞いてない。

聞かされても困るけど。

ただ長引かせたくはない。

優香に追い立てられるようにして、朝のHRが始まる前、屋上に向かう。

遊佐さんはもう学校に来ていた。

「おっ、やっと来たか」

こっちこっち、と手を振る。

「遊佐さん、何で私を待ってるんですか？」

「だって、楽しいから」

私は楽しくない！

でも、私なんて遊佐さんにとっては天から降ってきたおもちゃみたいなものなのかも……

「説得される気、ありますか？」

「さあな」

ガツクリ、頂垂れる。

予想はしてたけど、あんまりだ。

「そう簡単に折れたら男じゃねーだろ」

男の美学とかプライドとか捨てて下さいよ、留年してるんですから！

なんて、言えるわけもないし。

「遊佐さんはどうして授業に出ないんですか？」

「めんどくせーから」

私だって勉強大好きってわけじゃないけど……

「だったら、何で学校に来てるんですか？」

「居場所がねーから」

矛盾してる。

何で、授業に出るのが面倒臭い人が学校には毎日来てるのか。

「あなたはリストラされたオヤジですか！？　ここは公園じゃないです！　ブランコもありますん！」

「間違いなく、学校、だな」

冷静なツツコミはいりません！

「学校まで来るなら授業くらい出ればいいじゃないですか」  
「めんどくせー」

また、それですか。

「寝てればいいじゃないですか」  
「説得しようって奴がそーゆーこと言うか？」

「だって、私は遊佐さんが授業に出ればそれでいいんです。そりゃあ、補習も頼まれてますけど、授業態度までは約束にありません」

多分、そこからは先生とか委員長達の仕事。

「だからな、俺は嫌われモンだ。出たら迷惑する奴がいる。どうせ、みんな生きた心地がしねえとか言って、退学しろとか思ってるに決まってるんだ」

「私は遊佐さんに一緒に卒業してほしいです」  
「でも、本当は誰も望んじやいねえんだ」

何で遊佐さんはそんなに寂しいことを言っただろう。

「わからないです。遊佐さん、ちゃんとクラスの人達と話しました？」

「話すまでもねえだろ。ま、楓ちゃんにはあの空気はわかんねえだろうが」

私は遊佐さんじゃないからわからない。

多分、遊佐さんには遊佐さんなりに苦悩とかあるんだと思うけど……でも、授業に出ないのに毎日登校して何になるんだらう？

「きっと、遊佐さんが心を開けばわかってくれると思うんです。だって、遊佐さんは悪い人じゃないって思うんです」

半ばってというか、本当に脅されて引き受けたけど、私は遊佐さんのことを怖いとは思わない。

きっと、みんな、それをわかってくれるはずなのに……

「俺はワルだ」

多分、遊佐さんはそう思いたいだけ。全く、そういうことをしてないってわけじゃないみたいだけど……

「違います」

煙草吸ってるし、前に暴力事件起こしたらしいけど、根っからのワルじゃないと思う。

って、あれ？　今日は吸ってない。

「遊佐さん、今日は吸ってないんですか？　煙草」

「だって、楓ちゃん嫌いなんだろう？　まあ、好きで吸ってたわけでもねーし、禁煙ってやつ」

「やっぱり、遊佐さんわかってくれたんですね！　そうやって少しずつ進みましょう」

私は思わず、遊佐さんの手を握っていた。

「遊佐さんの手、あつたかい、ですね」

大きくてポカポカしている。

「今、楓ちゃんに触れてるこの手で俺は何人も殴った。この拳が血で真っ赤に染まるまで」

嘘じゃないかもしれない。でも、そんなに怖い手だと思わなかった。

「楓ちゃんの手は冷たいな」

「冷たすぎるんじゃないかって自分では思っんです」

手が冷たい人はどうのこうのなんて私は信じない。  
元々体温低いし、冷え性だし。

「氷に触れられてるみてえだ」

「ご、ごめんなさい！」

慌てて手を離す。何、どさくさに紛れて手とか握っちゃったんだろつ。

「いや、なかなか気持ちよかったぜ」

ニヤツと笑う遊佐さんはちよつと卑猥だった。

「そつだ。昼休み来いよ。一緒に飯食おうぜ」

昼休みはいつも優香と食べてる。でも、優香は行ってこいって言いそう。

「そつしたら、授業に出てくれますか？」

こうなったら、私はどんどん攻めなきゃいけないんだと思う。強気に攻める！

「まあ、後ろ向きに検討してやるよ」

「前向いてくれないきゃ困るんです！　って言うか、それ、検討しないってことですね？」

この人、手強い。ほんと、手強い。怖くないけど、こわい。

「じゃあ、待ってるから、そろそろ教室戻れよ」

いや、私は遊佐さんにも教室に行つてほしいんですけどね。

「遊佐さんも一緒に行きましょうよ」

「ん？ そんなに俺といたいなら、サボろっぜ」

手招きとかしないでください！

まったく、もう！

昼休み、予想通りというべきか、私は優香に追い出されるようにして屋上にいた。

手にはお弁当を抱えて。

「おう、待ってたぜ」

だから、待ってないでください！  
思わず叫びたくなる。早く、この又シ的な止めてほしいんですけど。

渋々、遊佐さんが示す正面に座って、包みを開ける。

「弁当、手作り？」

「まあ、たまにですけど……」

いつもってわけじゃない。

コンビニでパンを買う時もある。遊佐さんみたいに。

毎朝、買ってくるのかな……本当に授業に出ればいいのに。

「俺、楓ちゃんが弁当作ってきてくれたら、頑張れるかしんねえ」  
「はい？」

一体、何を言い出すんですかね、この人は。

「それ、本当ですか？」

「まあ、男に二言はねえとか言うよな」

信用できない。だって、後ろ向きに考えるとか言うし。頑なだし。  
私の弁当如きで何が変わるんだろ。

「毎日とは言わねえから、な？」

うつ……私、お願いに弱かったんだ。  
だから、クラスとか委員会とか何も関係ないのに、こんなことになってる。

「ほら、材料費」

ポンと五百円玉を投げられる。

「わっ、い、いいですよ！」

「受け取っておいてくれよ。な？」

私は意志が本当に弱い。

「あ、遊佐さん、放課後時間ありますか？」

「おう、暇だぜ」

そりゃあ、毎日学校に来て暇でしょうけど！

「補習しましょう。五分でもいいですから」

「嫌だ」

子供じゃないんですから！

「本当に考えてくれてるんですか……？」

「焦るなって。楽しく行こうぜ」

ほんと、お先真つ暗……

\*

翌朝の交渉は失敗、そして、お昼。

また私はお弁当を手に屋上に来ている。それも二人分。

「……楓ちゃん？」

お弁当を開けた遊佐さんは固まってる。

凍り付いたみたいに固まってる。蓋を手にした状態で。

「遊佐さん用特製生姜焼き弁当に何か問題でも？」

前にパパが使ってた大きなお弁当箱にご飯を詰めて生姜焼きを敷き詰めてみた。

私のお弁当はいつも通り冷凍食品とかご飯をちびちび詰めたのだけど。

「あのな……」

本当に遊佐さんが戸惑ってる。弁当自体は嬉しそうに受け取ってくれたはずなだけど。

「まさか、遊佐さんってベジタリアンとかヴィーガンだったりします？ 豚肉食べちゃいけない宗教の人とか？」

優香情報じゃあ、そんなのなかったはず！

私、今まで生きててそういう人に会ったことないよ！

「いや……生姜焼きとか好きだぜ？ マジで」

好きなら何でそんなにひきつった顔をするんだろう。

少しは喜んでくれるんじゃないかと期待してたのに……

もしかして、男はみんな生姜焼きが大好きって、前に天真君が言ってた気がするのが間違ってた？

「優香のお弁当を参考にしたんです。いつも大きなお弁当箱にご飯が詰まっててお肉が乗ってるんです。最初はお兄さんかお父さんの弁当と間違えてきちゃったのかと思ってたんですけどね」

お弁当箱自体、容量重視のシンプルで全く可愛げのない長方形だし。もちろん、色は黒だし。

「優香ママに聞いたら、食べ盛りの男の子はそういうの方が喜ぶらしいんです。お兄さんなんか折角可愛い弁当作っても反抗してコ

ンビニでパン買ったりしてたらしいですし」

「俺はちまちました可愛い弁当も好きだぜ？」

男の子ってわからない。全然わからない。

私の中の男の子の基準が天真君になってるのがダメなの？

「そうですか？　ほぼ冷凍食品ですけど」

お金貰っちゃったし、頑張ってみたのに、冷食三昧が良かったのかな？

「優香に相談したら、コンビニ弁当買って詰め直せばいいと言っ  
んですよ？」

優香ならやりかねないと思った。

いや、そんな労力すら嫌がって私にやらせるんだろうな……

一応、私達の関係は対等のはずなんだけど。

でも、優香が誰かにお弁当作るとか考えられない。

「まあ、俺のために作ってくれたんだよな」

「そうですよ、遊佐さんのためです」

そうしたら遊佐さんは食べ始めてくれた。

やっぱり男の子だなあって感じ。一口が大きくて、あつと言つ間に消えてく。

「ん、美味かったぜ。楓ちゃんはいいいお嫁さんになれるぜ」

「本当ですか？」

おう、と答える遊佐さんは嘔吐いてないと思う。

「何か感動しますね」

「俺のお嫁さんになんねえ？」

一体、何を言い出すのやら。

「授業に出ないとお嫁さんなんかできませんよ」

そう、遊佐さんには授業に出てもらわないと。  
それが全て。

放課後、私はある決意を固めていた。

「こうなったら、睡眠学習しましょう」

「は？」

「寝てていいです。私が教科書読みますから」

遊佐さんにやる気がないならこうするしかないと思った。  
教科書はちゃんと持ってきてる。

「それで勉強できたら誰も赤点とんねえだろ」

「少しずつでいいからやる気出してください」

せめてそこからでも始めてほしい。

「楓ちゃんが膝枕してくれたら聞いてやってもいい」

「膝枕……」

お弁当作ってきたら頑張ってくれるんじゃないか？

「俺、耳搔きしてもらうのが夢でよー綿棒持ってきてりゃよかったな」  
「私を何だと思ってるんですか!？」

私は遊佐さんの小間使いじゃない!

「わりーわりー。でも、俺なりに考えてるんだぜ? そこそこ前向きに」

「本当ですか？」

「おう、本当だぜ」

それ、本当に信じていいのかな？

## 虎とお友達

説得作戦から数日、何とか遊佐さんとの距離は縮まってきたと思うけど、一向に遊佐さんが前向きになる気配なし。

でも、いつの間にか煙草やめてるし。

この日も私は朝から遊佐さんを引っ張り出そうとした。

遊佐さんは私を見るなり、ポケットをゴソゴソして……取り出したるはお財布？

「二千元だっけ？」

「え？」

にせんえん？

それは一体何のこと？

「ロールケーキ、一本二千元って言っただろ？」

「そうですけど……」

そう言えば、そうだった。まったく任務遂行できてないけど。

「煙草止めたから、金浮いた」

「受け取れません」

受け取れるはずがない。

「ロールケーキの呪縛から解放されっぞ」

「それは違うと思います」

うん、絶対違う。お金で解決できるような呪いじゃない。

「ダチでもねえ奴からの頼みだろうが」  
「でも、賄賂受け取っちゃったんです」

受け取ってしまったから、もう存在するはずのないアイツがまだ体の中に存在するような気がする。

「ほとんどはダチの胃袋に収まったんだろ？ 白切っつけ」  
「一口食べちゃったんです」  
「無理矢理押し込まれたって言っただろうが」

無理矢理押し込まれて一口食べてしまった。吐き出すわけにもいなくて、流し込んだ。

「その罪悪感に負けて渋々承諾しちゃったんです」  
「そんなの無効だろ。自白を強要したようなもんだ」

そうかもしれない。そうかもしれないけど、今はそれだけじゃない。

「でも、いいんです。楽しいですから」  
「は？」

最初は渋々だったけど、私なりに楽しんでる。  
遊佐さんは悪い人じゃない。

「男友達ができたみたいで嬉しいんです」

友達は優香だけじゃないし、たまに喋る男子もいるけど、友達っていうほどじゃない。

「男友達、か」

「遊佐さんが嫌じゃなかったらですけど」

遊佐さんにとって、私は何だろう。

友達じゃないんだと思う。ただの迷惑な女？

「そっか……じゃあ、ダチだったら、武瑠でいーって」

「そ、それは……」

そうやって笑うことは迷惑じゃないのかもしれないけれど、でも、そんな気軽に呼べるはずがない。

「じゃあ、私は行きますけど、遊佐さんは？」

「行かねえ」

ガックリ。今日こそは、っていう期待は打ち砕かれた。

遊佐さんがいきなり授業に出るなんて天変地異が起こるようなきもするけれど。

「気が変わったらいつでも来てくださいね」

気も変わらないんだろうな、って思う。

遊佐さんが学校に来てる理由がわかれば、少しは何とかできるよ  
うな気もするのにな、はぐらかされる。

優香も何か知ってるっぽいけど、教えてくれない。

「あ、今日のお昼は唐揚げ弁当ですよ」

「おう、楽しみにしてる」

遊佐さんはいつもお弁当を美味しいって全部食べてくれるし、誰かのために作るって案外楽しいんだけど……

「一時間でも授業に出てみませんか？ 働かざる者食うべからず、っていう素晴らしいことわざが……」

「俺、馬鹿だから知らねえ」

二度目のガツクリ。遊佐さんに通用するはずがなかった。

＊

遊佐武瑠、手強し。

説得は難航してるとしか言いようがない。しまいには担任の先生まで私のところに探りにきたり……

委員長達も一回だけ聞きにきたっけ。それだけ。

「楓」

よっ、とか言って教室に現れたのは珍しい顔。

「あ、天真君！ どうしたの？」

結城天真君、私の幼なじみの三年生、生徒会副会長。

「結城さんも探りですか？」

「まあ、な」

優香の問いに頷く天真君。

「どうして天真君が？」

私が賄賂受け取ったから？

「結城さんは遊佐武瑠の旧友ですもんね」

「えっ、そうなの？」

「ダチだった、そういうことになっちまうんだろうな」

天真君は、なんか辛そう。話したくないみたいだ。

「喧嘩、したの……？」

「いや、そうじゃねえ。けど、俺じゃもうどうにもできねえから、あいつのこと、頼むな」

二人の間に何があつたのかわからない。

天真君は教えてくれなさそうだし、優香も知ってても言わないと思う。踏み込んだじゃいけない気もするし。

「それとな、楓、稜己が悲しんでたぞ」

「南城先輩が？」

天真君は自分の話を終わらせたいみたいだった。

南城稜己先輩は生徒会長。とっても穏やかで優しい王子様みたいな人ってみんなは言ってる。

裏があるって言うか、癖のある人で、キングとか呼ばれてたりするんだけど。

「ああ、お前がそんなにボランティア精神溢れる人間だったなら、どうして生徒会に入ってくれなかったんだって」

「いや、これは陰謀渦巻く何とかっていうか……」

私にボランティア精神があるわけじゃなくて、お隣にいる優香様が囃んでるわけで……

遊佐さんが言うには、お人好しってことなんだけど、つけ込まれたってことになる。

「お前がいれば、今頃無敵だったのに、って嘆いてる」

まあ、要するに南城先輩はちよつと変な人。

「南城、結城、玉城の城トリオで？」

優香は言うけど、そんなわけないって、思った。

「あいつ、結構子供だからな」

天真君の言葉が意味するところは肯定。

天真君と仲良くなった理由も名字に城がつくからっていう共通点的なのらしいし、私のことを妹のように可愛がってくれたりするのもそういうこと。

「結城さんっておじいちゃんですよ、生徒会の」

「否定できねえよな……それ。特に瀬山に言われると」

天真君は頭を掻いてる。

生徒会は南城先輩を筆頭に曲者ぞろいで天真君が一番の常識人ってことになる。

「まあ、それはいい。頑張れよ。あと、何かあったらすぐ俺に言え」

やっぱり、天真君は私のヒーローだっと思った。  
それなら、旧友を説得してほしかったんだけど、ダメっぽい。  
遊佐さんのやる気がないだけで、何かあるとも思えないんだけど。

## 虎の豹変

私の勘なんて、当てにならなかった。

そういうことなんだと思う。

その日、いつも通り説得に行ったのに、遊佐さんは笑って喜んでくれなかった。

来てほしくなかったみたいな顔、昨日までは普通に接してくれていたのに。何で？

「俺に関わるのは止めとけ」

本当に何で？ 私、何かした？

「何で、急にそんなこと言うんですか？」

「飽きたから」

何、それ……？

飽きたって何？

「煙草、やめたって言ったじゃないですか」

傍らに煙草の箱、ライター、それから吸い殻。

「そう簡単にやめられるかよ」

遊佐さんからは紛れもない煙草の臭い。

煙草やめたからお金浮いたって言ったのに。

「遊佐さん、変です」

「これが俺だ。俺はどうしようもねえワルだからな。おままごとに付き合うのも終わりだ」

「違う、遊佐さんはそういう人じゃない！」

違う、違う、違う！

遊佐さんと話すようになって数日だけど、遊佐さんは怖い人じゃない。

そりゃあ見た目は怖いけど、でも、優しいところもあると思う。

「あんたに何がわかる！？」

「わかりません！でも、授業受けて下さい！」  
「るせえ」

低い声、鋭い視線、怖い遊佐さんに体が震える。  
いつもの遊佐さんじゃない。

「説得してみろって言ったの遊佐さんじゃないですか！」  
「ウザくなった。sonだけだ」

じわり、視界が滲む。

何で？ 何でそんなこと言うの？

だって、私、何でも遊佐さんの言う通りにしたよ？

「遊佐、さん……？」

「犯されてえのか？」

「え……？」

何を言われたのか、わからなかった。

腕を掴まれて、気付いたら煙草の臭いを思いつきり吸い込んだ。

遊佐さんの胸に倒れ込んでる。

「それとも、授業に出たらやらせてくれんのか？」  
「なっ……」

パツと顔を上げて、遊佐さんのアップ。超アップ。  
どンドン、近付いてきて、何が起きたかわからない。

まさか、キス、してる……？

息ができなくて、遊佐さんの胸を叩くけど、ビクともしない。  
酸素を求める唇を割り開いて入り込んできた舌は好き勝手に動いて、苦い。

ファーストキスは煙草の味？

ようやく離れて、私は呼吸を整えるのに必死で、滲む視界の中で  
遊佐さんが唇を舐めて笑う。

「一発やらせてくれたら一回くらい出てもいいぜ？」

カツと頭に血が上った気がして、頬に添えられた手を払って、私は思いつきり遊佐さんの顔を殴っていた。

「つてえな……っ！」

「あなたは最低です！ もう遊佐さんなんか知りません！！」

遊佐さんの唇が切れて血が出るとか、拳が痛むとか、そんなの  
どうでも良かった。

私は屋上から逃げるように駆けだした。

屋上から早く遠ざかりたくて、廊下を走っちゃいけないルールな

んで無視してた。

そうしたら、誰かにぶつかりそうになって、急ブレーキ。

「おっと」

「すみません！」

「……楓？」

「天真君！」

凄い偶然。天真君だった。

知らない男子っていうか、怖そうな人じゃなくて良かった。

安心したら、ボロボロ涙が出て、天真君が慌てたのがわかったけど、止められなかった。

「お前……ちょっと、こっちこい」

天真君は私の腕を引いて、歩き出すから、私はついていくしかなかった。

暫く歩いて、天真君が扉を開けて、中に入って、促されるまま椅子に座った。

「楓ちゃん？」

その声を聞いて、やっとここがどこかわかった。

生徒会室だ。いつも南城先輩が籠城してるって天真君が言ってたっけ。

「天真、確認しておくけれど、君が楓ちゃんを泣かせたわけじゃない

いよね？ まさか、そんなことないよね？」

違う、って否定しなきゃって思うのに、漏れるのは嗚咽ばかりで、泣きやまなきゃって思うほどに苦しい。

拭おうとした手はそつと掴まれて、膝の上に下ろされる。

「とりあえず、無理に拭ったりしたらダメだよ。好きなだけ泣くん  
だ。でも、すぐに冷やさないとね、待ってて」

南城先輩が動く気配がして、それからまた近くにきたと思ったら  
ひんやりするものが目に押し宛てられた。

何だかわからなくて、それを掴んで見てみる。タオルに包まれた  
保冷剤みたい。

そうしたらまた目に宛てるように促されて従う。

頬に落ちた涙を多分ティッシュで吸い取るようにしてるのも南城  
先輩なんだろうと思う。

キングと呼ばれるこの人は何から何まで完璧だ。殿下って呼ぶ人  
までいる。

何で、保冷剤がすぐ出てくるのかなんて絶対聞いちゃいけない。  
生徒会室に冷蔵庫があることにツッコミを入れちゃあいけない。電  
子レンジや電気ポットがあることにも。

「一応、事情を知らない身として席を外すけど、弱みにつけ込んで  
不埒な真似をするようなら わかるね？」

「俺を何だと思ってんだ。お前と一緒にの方が危ねえだろ。空気読め  
たんなら、さっさと出てけ」

天真君は不機嫌だった。迷惑かけちゃったな……

「それで？ どうしたんだ？」

南城先輩が出ていった音がして、天真君は問いかけてくる。  
その声は穏やかだ。いつだって、そう。私が頼り続けてきた優しいお兄ちゃんの声。

「天真君、何かあっちゃったよ……遊佐さんに嫌われちゃった。飽きたって、うざいって」

遊佐さんに言われたことが全部脳内でリピートされて苦しくなる。

「武瑠が……？」

「それで、私、殴っちゃって……」

まさか、人を殴るなんて思わなかった。  
今でも右手は震えてる。私が遊佐さんを……

「あの瀬山が買収されたからには理由があるんだろうけどよ……」

私も単に優香が一本二千円のロールケーキ如きに目が眩んだとは思えない。

親友とか言いながら、よくわかってない部分も多くて、天真君はちよつと苦手だったりするらしいけど。

「遊佐さんってどうして留年したの？」

この前、教えてもらえなかったことを聞いてみる。  
今なら、そう思ったから。

「あいつ、ある奴を助けようとして暴力振るって、それが見付かつ

て、あいつだけ停学になって、それから来にくくなったみたいだな」  
「そう、だったんだ……」

遊佐さんはやっぱり優しい人だったんだって思うと安心した。  
噂は悪いところだけはやたら広まるから。

「俺も説得は試みたんだが、ダメだった。あれ以来、避けられるんだ。あいつ、俺のこと恨んでるかな……助けてやりたかったのに、間に合わなかったから」

「遊佐さんは恨んでないと思うよ」

遊佐さんからそういう感情を感じ取ったことはない。

誰かを憎んでるとかそういうんじゃない、いつも屋上にいた遊佐さんは単純に自分の居場所がなくなっただけだと思っていたんじゃないかな。

多分、もう作れないって思って、それでも、学校に来てるのは未練があるから？

「あ、でも、学校に毎日来てるのは何でだろう……リストラされたサラリーマンみたいな感じ？」

「いや、あいつは一人暮らしだから、何か目的あるんだと思ってたけど……」

天真君にもわからないみたいだ。

そして、その理由はもう一生わからないのかもしれない。

私は遊佐さんに嫌われたから。

「今日の遊佐さん、何か変だったの」

本当に昨日までは何も変わらなかった。

飽きたとかうざいとか言われたけど、でも、私には遊佐さんが今まで嫌々ここに付き合ってくれていたようには思えない。

そう思いたくないだけなのかもしれないけれど。

でも、日に日に自然な遊佐さんが見れた気がしていた。

「とりあえず、こつちでも探ってみる。だから、お前はしばらく武瑠と距離おけよ。多分、瀬山もそう言うから」

「うん、わかった……」

天真君が言うなら、そうするべきなんだと思う。

その上、優香が同じことを言ったら、従わないと大変なことになる気がする。

「……ごめんね、天真君」

「迷惑かけたと思ってるなら、気にすんな。俺が何もできなかったせいで、なんでかお前に回ってきたんだ」

「でも、南城先輩にも……」

「あいつは、いいんだよ。お前の世話焼くの好きみたいだし？ 今度会ったら、ありがとう、って言うっておけ」

南城先輩、前はよく会うとお菓子くれたな……それが凄く高級だったし、量が多かったりして、天真君が「楓を豚にしたいのか」って言うて落ち着いたんだっけ。

お礼、ちゃんと言わなきゃ。

「もう少し休んでくか？」

「ううん、もう大丈夫」

いつまでも泣いてられないから。  
いつまでも甘えてられないから。

## 用済みの飼育係

結局、天真君は送ってくれて、教室では優香がつまらなそうにケ―タイをいじってた。

「あんた、泣いたんだね」

優香様は何でもお見通しって感じだった。  
優香を欺ける人間を私は知らない。

「南城先輩が冷やしてくれたんだけど……」

「原因は遊佐武瑠だね。何、された？ ……いいや、言わなくて」

それも、きつとお見通し。

優香はいつも軽いと思われがちだけど、今はシリアス。

「あいつ、さつき教室に行っただみたいだよ」  
「そっか……」

それなら、良かった。  
私の役目も終わった。そういうことだから。

「楓、約束して。遊佐武瑠には暫く近付かないこと。あたしがいい  
って言うまで」

「うん……天真君も言ってたよ」

優香は凄く真剣で、口答えできる空気でもなく、既に従うことは  
決めてる。

「結城さんはともかく、あたしの言葉は信じなつて。ちゃんと、あなたの気持ちわかつてるから」

天真君に苦手意識を持たれてるのを知ってるから優香もいじわるしてるのかもしれない。

優香は大体天真君を蔑ろにしてる。

「じゃあ、今日は帰りに優香さんがケーキを奢ってあげよう」  
「ほんと!？」

優香が奢ってくれるなんて、珍しい。

「タルトじゃなきゃ食べないよ?」

私はスポンジとか生クリームとかカスタードとか甘い物がちよつと苦手。

フルーツタルトとかは好き。つまり、ロールケーキは最悪の食べ物。

「駅前のお店の新作レモンメレンゲタルトでどうだつ?」  
「うん!」

駅前のお店と言えば、金魚鉢のパフェで有名なところ。優香のお気に入り。

\*

昼休み、教室には、あの極悪優等生院長副委員長コンビというか、

カップルがきた。

「遊佐君がついに授業を受けに来てくれたの。玉城さんのおかげね」  
「うむ。君なら、やってくれると思っていたぞ」

そう言われても、私は遊佐さんに嫌われたし、補習だつてできてないのに。

「じゃあ、後はそっちのクラスの問題つてことで、契約は終わり。ロールケーキの呪縛もなし。オーケー？」

ノーとでも言おうものなら、後が怖い。  
そんな優香の雰囲気二人はうんうんと頷いて、そそくさと戻つてつた。わざわざお弁当持参してきたのに。

「で、なんで、結城さんがいらっしゃるんです？」  
「まあ、たまにはいいだろ」

昼休みのお客さんは二人だけじゃなかった。  
優香が天真君を鋭い眼差しで見えて、ちよつと怖い。

「あ、南城先輩。朝はありがとうございました」  
「いいんだよ、当然のことさ」

南城先輩は笑顔で返してくれる。とってもスマートな人。  
とってもスマートに椅子と机を調達して、ここに加わってるわけだし。

「南城先輩は気障ですね。お二人が揃つてると視線が痛いんですけど」

「いいじゃないか、たまには」

南城先輩のスマイルに周囲がざわめく。

先輩は大人気。天真君もだけど。つまり、生徒会は大人気。

でも、優香は寧々子先輩のことだって、猫様って呼ぶくらいだし、生徒会が好きじゃないのかも。

「つーか、楓。何で弁当が二つあるんだ？」

「あ、これは……その……」

「武瑠、か」

鞆の中のもう一つのお弁当箱に気付かれちゃった。

しかも、見抜かれた……！

「あたしのために作ってきてくれたんだよね？」

「おいおい、瀬山。そんなでけー弁当抱えておいて、まだ食う気が？」

優香のフォローは嬉しいけど、天真君は納得しなかった。

いや、優香なら私のお弁当までペロリだけど。

「俺にくれよ」

そう言う天真君だってお母様特製弁当抱えてるよね？

「そういうことなら、俺がもらってもいいってことになるよね？」

いや、南城先輩も豪華すぎる弁当持ってますよね？

大体、先輩は小食じゃなかったでしたっけ？

そのお弁当、豪華な割に優香のより小さいですよ？

「さあて、楓。そのお弁当は誰にくれるのかな？」

優香の目には脅しの色が混ざってる。

天真君と南城先輩までこっちを見る。

みんな、笑顔なんだけど、笑顔なんだけど……！

「良かったら、三人で食べてください……」

三人のニツコリがとっても怖くて、そう言うのが精一杯だった。  
納得してないって感じだったけど、結局、三人で分けて食べてた。  
同じ釜っていうか、同じお弁当箱の中のご飯を食べたってことで  
仲良くなれないかな？ もう少し。

\*

それから数日、遊佐さんを遠目に見ることはあっても、接近することはなかった。

優香が避けてた可能性もある。

でも、優香がいなかったこの時、私は遊佐さんとバッタリ会ってしまった。

頭にハンバーグ乗せてる系の人のお友達的な男子と一緒に歩いてたのも見たけど、今日は一人だった。

「遊佐さん……」

呟けば、遊佐さんはプイッと顔を背ける。それは逃げていくように見えた。

「何で避けるんですか！？ 普通、逆ですよ！ 私が避けたいくらいなのに！」

避けられたことが悲しくて、思わず遊佐さんの腕を掴んでた。  
本当は私がプイッってするべきなのに。

「だったら、好都合だろうが」

「そういう問題じゃありません！」

釈然としない。全然、スッキリしない。イヤな終わり方だった。  
それは解決してないことな気がする。

「うるせえな、ちゃんと授業出てるし、クラスにも馴染んだつもり、  
それでいいだろ？」

委員長達は何も言わなかったけど、ハンバーグ系男子と仲良くさせるために授業に出させたかったわけじゃないと思う。

「何で、あんなことしたんですか？」

「別に、理由なんかいらねえだろ」

それがずっと気になってた。

ファーストキスだったのに、煙草なんか嫌いなのに。

「じゃあ、何で避けるんですか？」

「仲良くする理由ねえだろ。ご苦労様でしたってことで」

挨拶ぐらいしてくれたっていいのに。そりゃあ、あんなことされただけ、でも、これは悲しい。

こうして冷たくされることの方が遙かに辛い。  
嫌だった。でも、何もかもがそうだったわけじゃない。  
殴ったことだって、本当は謝りたかったのに。

「キスくらいでごちゃごちゃ言うなよ。あ、キスも初めてだったのか？ お堅いしなあ。まあ、ごちそうさまでしたってことで」

ブチッと何かが切れた音が自分の中ではっきり聞こえた。

「ふざけんな！」

「ああ！？」

それは反射的なものなのかもしれない。威圧的に睨まれるけど、怖くなかった。

「居場所がねえとか、迷惑する奴がいるとか、逃げてただけでしょ！？ 学校に来てるのに授業にもしないで、それが迷惑じゃなかったとでも？ 今だって解決した気になって、遊佐さんは本当はただの情けない弱虫ですよ！ 見損ないました、本当に。もう金輪際話しかけたりしませんから、ご心配なく！」

言いたいだけ言って、クルリと踵を返す。遊佐さんが何か言った気がするけど、聞き取れなかった。聞く気もなかった。

「玉城さん……」

「玉城君……」

どうやら、超極悪優等生風委員長副委員長カップルに見られてたみたいだ。二人だけじゃない。  
でも、どうだっていい。

どうせ、私は用済みなんだ。もう戻れないんだ。

## 狙われた元飼育係

未練がなかったと言えば、嘘になる。

こうなつて初めて、遊佐さんといて楽しかった理由がわかった。いつの間にか遊佐さんのことを好きになつてた。それなのに、最悪の終わり方をした。きっと、上手く行くはずなんてなかったんだ。

「玉城楓ちゃん、だよね？」

一人きりの放課後、靴を履いたところで目の前にいるのは、ハンバーグ系男子。どう見てもそう。不良以外の何者でもない系男子。その気を抜いたら落ちそうな腰パンは何なんですか。ガムは腹の足しになりますか。

「おい、シカトしてんじゃねえよ！」

ちよつと怒りのセンサー敏感すぎませんか？  
ちゃんと牛乳飲んでます？

そう言う私は小学生の時に担任に無理矢理飲まされて以来牛乳大嫌いですけど。

「人違いです」

「とぼけてんじゃねえ！」

そりゃあとぼけられるなら、そうさせていただきますよ。

「もう一回聞けど。玉城楓ちゃん、だよね？」

手には明らかに隠し撮りの私の画像が映ったケータイ。  
わかってるなら聞くなよ、と思わないわけでもない。

「そうですけど、何か？」

全速力で逃げたいんですけど、何か？

「君のお友達のタケル君のことで話があるんだけど、来てくれないかな？」

「タケル君なんてお友達はいません」

「おい、次とぼけやがったら、女でも容赦しねえぞ！」

いや、別にとぼけてません。

タケル君に心当たりがある気はしますが、お友達なんかじゃありません。

「遊佐だよ、遊佐！」

「遊佐さんは友達じゃありません」

私と遊佐さんは何だろう。友達じゃない。敢えて言うなら、もう絶交してる。

「ごめんごめん、カレシだったか」

「それ、もっと不愉快です。私と遊佐さんは優等生の面しやがった極悪カップルにはめられたせいで不本意に知り合っただけで、もう終わって何の関係もないですから」

何だかイライラしてきた。この人達も煙草臭いんだ。

「そう言わずにさあ、俺らに付き合ってよ」

あーあ、嫌な予感。俺ら、ってことは他にいるんだ。  
逃げなきゃいけない。でも、もう手遅れ。

「私、用がありますから、失礼します」

くるりと背を向けてダッシュのつもりだったけど、腕を掴まれて、その上口を塞がれた。

暴れてみるけど、ビクともしない。

「大人しく付き合ってくれねえと……君のお友達がどうなっても知らねえよ」

そう言つて、見せられた画面に私と一緒に映ってるのは勿論優香様だった。

「ご愁傷様というか何というか……確実に振り返りに遭うと教えてあげたい。」

この人、優香のこと何も知らないんだ。大人しそうに映ってるけど、大食い系で策士系女子の優花様がいかに恐ろしい人物なのか教えてあげたいよ。

でも、黙ってたら了承と受け取ったのか、「さあ、行こうか」なんて言つて、肩を抱かれる。ああ、不愉快。

「いてっ！」

思いつきり足を踏み付けて、逃走開始！  
でも、上手くいかないわけで……

「君に来てもらわないと困るんだよ。じゃないと、俺らの遊佐が退学になっちゃうんだ」

別の不良さん、いらっしやい。退路は塞がれて、後ろは……振り返りたくない。

絶対、遊佐さんの友達じゃないって思った。

遊佐さんの敵だって感じた。

嫌々ながら、脅しに屈したフリでついていった先は旧体育倉庫。不良さんいらっしやいな溜まり場。

中にはそういう人達がいっぱい。絶対絶命。

逃げ場は今塞がれて、ニヤニヤ笑いがこんなにちは。

「それで、お話って何です？」

「そんな怖い顔しないでさあ、仲良くしようよ」

いや、仲良くしたくない。したくないんですよ。

肩とか抱かなくてください。煙草臭いんで近付かなくてください。

また優香に消臭スプレー噴射されるじゃないですか。

「さっさと用件言ってください」

「まずは仲良くしようぜ、俺ら」

何で、顔をそんなに近付けるんですか！？

何とか押し退けるけど、一体何人いるんですか。

いや、私だってピンチなことくらいわかってますよ？

「私、忙しいんです。話がないなら失礼します」

「そうつれないこと言っなよ」

「触らないでください！」

何で、抱き寄せようとするんですか!?

嫌だ、嫌だ、嫌だ!

「おいおい、楓ちゃん。俺ら、仲良くしようってのに。そりゃあねえだろ」

だから、こっちは仲良くしたくないんです!

しかも、また脅しとばかりにケータイの画面見せてくるし! むしろ、その画面から優香様を召喚できないかな……

「一つ言っておきますけど、私のお友達の優香様だけは絶対に怒らせない方がいいですよ。ぶちギレてるようで、理性的だから、やることなすことえげつないんですよ。言葉の暴力なんですけどね。廃人になりますよ」

脅しじゃない。これは事実。あの腹黒二重人格委員長よりも遙かに凶悪な二重人格。

ほんと、今すぐ優香様が助けにきてくれないかな……

「楓ちゃんさ、自分の心配した方がいいんじゃない?」

パチンとりボンが外れる音がした。

その手の主めがけてエルボー、離れた隙に急所を狙う。

父親仕込みの金的蹴りは天真君を悶絶させたことだってある。天真君に何かされそうになったとかじゃなくて実験台にさせられたんだだけ。

「うぐっ……」

見事に決まって私は出口を目指す。番人と目が合った。

「てめえ……っ！」

胸倉を掴まれた。でも、好都合。

私はその手を両手で上下から掴む。そして、下の方の肘を乗せる  
感じで……！

「てっ……！」

よし、膝をつかせることに成功した。私だって多少護身術の心得がある。

後はこのドアを開けて、生徒会室に駆け込めばいい。  
でも、指先が触れた瞬間、体が後ろに引かれる。

襟を掴まれて、首が絞まって苦しくて、暴れても足が届かなくて、  
そのまま体が倒れる。

「げほ、げほっ……」

盛大に埃が舞って、汚いマットの上に倒れたのだと気付く。  
その埃臭さから噎せ、衝撃で対応が遅れている内にのしかかられる。  
る。

暴れて逃れようとする手に、足が掴まれて強く抑え付けられ、身  
動きができない。

「おい、てめえら、ちゃんと抑えてろよ？ 暴れられちゃあ困るか  
らな」

私を見下ろす男が舌なめずりして笑った。  
ブチリ、嫌な音がして、何かが飛んだ気がした。ビリッという音

まで聞こえる。

「いやっ……」

怖い、怖いっ……！

叫ばなきゃ、こんなところ誰か通る可能性なんて少ない。でも、もしかしたら……

「口も塞いどけ。この女、かなり厄介だ」

思いっきり息を吸い込んで大声を出そうとした瞬間、大きな手のひらが口を覆う。

他の手は無遠慮に肌を這い回って、怖くて、気持ち悪くて、苦しくて涙が滲む。

何も見えない。もう何も見たくない、助けて、遊佐さん！

そう思った時、光が射し込んだ気がした。

「なっ……ごふうっ！」

何が起こったのかよくわからない。変な声が聞こえたと思ったらドサリと倒れるような音がした。

「何だ、てめえ……！？」

手が一つ外れた。

「ぐうっ……！」

また呻き声が聞こえた。

誰か助けに来てくれた。遊佐さん……？

「ゆ、結城！？」

天真、君……

「な、何でてめえが！！」

「うちの猫の目をなめんなよ？」

その声は確かに天真君だった。

「俺の幼なじみに手出してただで済むと思うなよ？」

天真君からは恐ろしいほどの殺気が放出されてる気がした。

手が次々に外れて、次々に呻きや転がされる音が聞こえる。

そして、天真君が私にのしかかっている人の首根っこを掴んで引き剥がしてポイツと投げ捨てる。

それから、私に手を差し出してくれる。

「天真君……」

ああ、やっぱり私のヒーローは天真君なんだって思った。

私では全く太刀打ちできなかった彼らを天真君は軽くあしらってしまふ。昔から天真君はとても強かった。

助けてくれてほっとしてる。来てくれなかったらどうなってたかわからない。

でも、本当にヒーローになってほしい人は私を助けてくれないんだって気付いた。

助け起こしてくれる手は力強い。それから庇うように見せる背は

遅い。

けど、これじゃない。

「……お前ら、覚悟しろよ」

底冷えするような声で天真君は全員に警告していた。とつくに危険信号、天真君は生徒会一の武闘派だから。

でも、後ろに怪しい影が揺らめいた気がした。何かを振りかざして……

「天真君、危ない！」

とつさに叫ぶけど、天真君はニツと笑って、まるで後ろが見えていたみたいに、その手を掴んでひねる。落ちたのはどうやら角材？

「やるじゃねえか、結城」

「お前らとは鍛え方が違うからな！」

多分、天真君の長い足による前蹴りが繰り出されたんだと思う。それから、私の手を掴んで、出口の方へ押しやる。

「楓、逃げろ！ どこに逃げたらいいかわかるな？」

わからないよ。生徒会室？ 職員室？ こんな格好で？

私を逃がすまいと伸びた手を天真君が捻り上げる、早くしろ、とその目が言っている。

「お前が一番行きたいところに行けよ。一番会いたい奴がいるところだ。そこが一番安全だ。いいな？」

ああ、何だ。簡単じゃないか。

頷いて私は走り出す。全速力で、昇降口まで走って、靴を脱ぎ捨てて、上履きも履かずに駆け出す。後ろを振り返る余裕はなかった。常に後ろから追いかけてい

るような妄想に取り憑かれていた。

虎と仲直り？

階段を駆け上がって、扉を開け放つ。

「遊佐さん！」

「楓、ちゃん……？」

そこに遊佐さんがいないなんて考えもしなくて、思った通りの姿がそこにあつた時にはほっとして、ガクリと体の力が抜けた。

慌てたように駆け寄ってきて、遊佐さんは体を支えてくれた。

でも、言葉が出ない。息は切れ切れ、脇腹が痛くて、体に力が入らない。

「誰にやられた！？」

多分、遊佐さんはブラウスに気付いたんだと思う。一瞬だけ、胸元を見て、それから肩を掴んで真っ直ぐに私を見つめてきたから。けれど、私は掻き合わせるわけでもなく、答えるわけでもなく、遊佐さんに抱き着いていた。

離したくない。たとえ、突き飛ばされても今は、今だけでも離れたくなかった。

「楓ちゃん……？」

「遊佐さんが好き……」

そう、それが全ての答え。

さっきのことは遊佐さんにキスされた時とは違った。自分でも落ち着いていたと思う。でも、嫌悪感でいっぱいだった。

「私、遊佐さんのこと、全然知らないのに……でも、好きなの……！  
好きになつてたんです！」

遊佐さんの反応を知るのが怖くて、ギュッと抱き着く。煙草の臭いはしなかった。

腕が回されたのがわかって、引き剥がされると思つてもっと強く抱き着くけれど、ポンと頭を叩かれただけだった。

「お前が先に言っくんじゃねえよ、馬鹿」

抱き締められて、わからなくなる。

「今度こそ俺から言おうと思つてたのにな……」

「遊佐さん？」

今度こそ？

わからなくて、遊佐さんを見上げる。

「俺はな、お前よりずっと前からお前のことが好きなんだよ」

じつと見れば、遊佐さんは照れたように頭を掻いて……

「お前がここに来た時、俺は夢を見てるんじゃないかと思つた」

思い返せば、あの時遊佐さん、ちょっと変だったけど。  
言つてること全然わからなかったけど。

「一目惚れした女が目の前に現れたんだから」

ひとめぼれ？

それは、一体いつのお話ですか？  
あれ以前に遊佐さんと接点はないはず。“白虎”なんて怖い人知りません。

「俺が毎日学校に来てた理由は、学校に来ればお前を見ることができるからだ」

「ほ、本当なんですか……？」

からかわれてるんじゃないかって思う。  
だって、この前のことがなかったみたいだから。

「本人に言えるわけねえだろ」

何で、授業には出ないのに、学校には来ているのか。  
その疑問に頑なに答えなかった理由、確かに納得できる。

「でも、この前……」

「あれは……」

遊佐さんにひどいこと言われた。

あれはもう嫌いになったってことじゃないの？ 幻滅したんじゃないの？

遊佐さんが口を開こうとした時、なぜかノックの音が聞こえた。  
それから扉が開く。

「取り込み中悪いな」

「……結城」

「天真君！」

ばつが悪そうにしてるのは、天真君。

「まさか、てめえが……」

遊佐さん、急に殺気立って、何か勘違いされてます？

「違う、違うんです！」

天真君はヒーローなのに。

今にも天真君に殴りかかりそうで、私は必死に遊佐さん抱き着く。何で、そういう誤解をするの？

「滅茶苦茶、頭に血が上ってるじゃねえかよ」

天真君は呆れてるっぽい。

「誰が幼馴染に手え出すかよ。そいつを傷付けようもんなら俺は親父に半殺しにされた拳句に、そいつの親父にトドメを刺される。そんなんごめんだ」

うちのお父さん、天真君に厳しいからな……天真君のお父さんもだけど。

だから、天真君、おじいちゃんとか言われちゃうんだ……相当鍛えられてるってことなんだけど。

「天真君、大丈夫なの？」

あの人達、どうしたんだろう？

「ああ、猫も呼んで、こっちで処理した。今度はそいつに殴らせる

わけにはいかねえからな」

そう言えば、猫の目がどうか言ってたっけ。

優香が言うところの“猫様”白河寧々子先輩。

天真君が猫っている時は大体寧々子先輩。

生徒会の中でもそういう人達を相手にする専門とか思われてる。

「あいつらか？」

「まあ、お前の心当たりのあるあいつらだろうな」

あいては遊佐さんのことよく知ってる感じだったし、“白虎”とか“星高の白い虎”とか言われる人は敵も多いんじゃないかって思う。

「俺が関わるのやめれば、手は出さねえ、って言ったのに」

「あいつらの言うことなんて、信用できねえだろ」

天真君は冷静な突っ込みを入れるけど、遊佐さんが言ったのはどういうこと？

「遊佐さん……？」

答えがほしくて見るのに、遊佐さんは天真君を睨んでる。

「殴らせろよ、あいつら」

遊佐さんの声は猛獣の唸りのように低く、息が止まるくらいその視線は怖いほどに鋭い。

怖くて、遊佐さんが飛び出していかないようにしがみつくのに、今にも振り払われそう。

「お前はすぐ頭に血が上るし、守るためならいくらでも人を殴る奴だからヒヤヒヤした。今度は停学じゃ済まねえからな」

「退学になったって構わねえ、殴らねえと気が済まねえんだよ……」

「ダメだ」

天真君は強い口調で言うけれど、遊佐さんは聞く耳を持たない感じ。

「一緒に卒業できなくなるなんて嫌です！ そんなの嫌です！ 絶対、嫌です！！」

この手は絶対に離さない！ ぎゅうつと抱き着く。

事情はよくわからないけど、でも、遊佐さんは授業に出てくれたし、うざいと言ったのも何かの間違いのなものだと思いたいし。

「楓ちゃん……」

「暴力振るう人は嫌いです」

暴力反対。私は“白虎”の遊佐さんを知らないから。だから、そんな遊佐さんが好きなわけじゃない。

私のアレは父親直伝の護身術であって、暴力じゃないと思いたいし……天真君や寧々子先輩もそう。

遊佐さん、落ち着いてくれたかな。

そう思った時、またノックが響いた。屋上つてノックするところだっけ？

「結城、あなたがいてお取り込み中ってことはないわよね？」

開いた扉越しに天真君に問うその声は寧々子先輩の声だった。

「ねえよ」

結城君が答えると、寧々子先輩がすつと入ってきた。

「寧々子先輩！」

抱き着きたかったのに、遊佐さんが許してくれなかった。

自分から抱き着いたとは言っても、恥ずかしくなってくる。こんなところを寧々子先輩に見られるなんて。

そりゃあ、天真君にはもうガッツリ見られてるのに。

「えーっと、その格好じゃあ帰れないわよね」

寧々子先輩はさつと顔を背けた。

そうだった。私のシャツはビリビリ……

「俺のシャツ着ろよ。ねえよりましだろ？」

「あなたの汗臭いシャツなんか、ない方がましよ。さつさと離れなさい。ほら、楓ちゃん。こっちにおいで」

寧々子先輩は結構ハッキリ物を言う。普段から不良委員会こと風紀委員会の相手で遊佐さんみたいなタイプも慣れてるだろうし。

腕を広げる寧々子先輩を見たら、聖母が光臨したような気がして私は遊佐さんの腕から抜け出してそこに飛び込んでいた。

「さあ、これを貸してあげるから」

ひらっと広げられたのは真っ白なシャツ、胸元には猫のアップリケ。

前に聞いたことがある。寧々子先輩の大ファンの女の子がいて、その子にやってもらったんだって。

何だっけ、フルーツの名前の女の子。同じ学年だけど、面識ないなあ……

「これ、寧々子先輩の……」

「そう、私の予備、使って」

さっと胸元に押し当てられる。寧々子先輩細いから入るか不安なんだけど。

「お前はよく破くし、汚すからな」

背向けてるからわからないけど、天真君が笑った。

「あんた達が、私に荒事押し付けるからでしょう？　じゃなきゃ、十枚もストックしないわよ」

寧々子先輩は忌々しそう。好きで不良の相手してるわけじゃないって言ってた。

南条先輩が言うには他に適任がいなくてことらしいけど。

「遊佐武瑠、あなた、落ち着いたら協力しなさいよ」

「何で俺が……チッ、わかったよ」

遊佐さんは嫌そうだったけど、寧々子先輩に睨まれて渋々従った。

遊佐さんにも怖いものがあるのかもしれない。“白猫”は“白虎

”より強し？

結局、帰り道に遊佐さんがこの前のことを謝罪してくれた。

肝心の事情はところどころ天真君の補足が入った。

あの人達はかつて遊佐さんに殴られたことがあるらしい。それは遊佐さんが誰かを守ろうとした云々に繋がるとか。

遊佐さんが守ろうとした人は結局、転校してしまったらしいけど、彼らにいじめられて病院送りにされてしまったらしい。

遊佐さんはそういう人達のために自分の拳を痛めてたって天真君は理解してたけど、賛同するつもりはないみたい。私もそう。だって、それは暴力に暴力で対応するってことだから。

でも、遊佐さんはもう暴力を振るわないって約束してくれた。

今回、彼らの標的が私になって、遊佐さんは私を遠ざけようとして、あんなことを言ったんだって。そうすれば手を出さないって。もちろん、そんなの嘘だった。私を盾にすれば遊佐さんが何でも従うと思っただけ。

でも、もう大丈夫だって天真君は言った。遊佐さんはこれから授業に出て、補習も受けてくれるって約束してくれたし。

虎と仲直り？（後書き）

次回、エピソードです。

## エピソード

翌日のお昼、優香はすっかり不機嫌だった。

眼光鋭く遊佐さんを睨んでる。

そう、私達の教室に遊佐さんがお昼を食べに来たわけで。

「マジなんだな。その色気のねえ弁当」

遊佐さんは勝手に椅子を用意して、私の隣に座って、優香のお弁当を覗き込んでる。

屋上にはもう行かないって約束したから。今日は、クラスの方で食べるって言ってたはずなんだけど……

お弁当だって、朝、教室に渡しに行っただし……

「何で、あなたがいらっしやるんです？ 楓のストーカーだった遊佐さん」

「す、ストーカー！？」

優香の声はトゲトゲしてて、私もちょっとこわいくらい。  
って言うか、何、その話？

「誤解を招く言い方してんじゃねえよ、二重人格蛇女。付き合ってるんだから、当然だろ？」

「あの、遊佐さん、何で優香の二重人格知ってるんですか？ って言うか、優香、ストーカーって何？」

優香の二重人格は本当の話、何と言うか、本性というか、たまに对兄弟用の優香が出てくる。

兄弟仲が悪いってわけじゃないんだけど、やっぱり言い争いには

なるみたいで。

「それより、何で天真と南城までいるんだよ？」

遊佐さんははぐらかすように視線を彼らに向けた。

南条先輩のニツコリでちやっかり机と椅子を借りたりして、いつもは二人きりのお昼が何だか大所帯……でもないか。

委員長と副委員長が来たんだけど、やっぱり帰ってった。

「僕達、お父さんとお母さんだからね」

「こいつは他人の邪魔が趣味らしいからな」

天真君はお守りだと肩を竦めた。

天真君は大変だと思う。南城先輩は曲者だし、その点で寧々子先輩はもつと苦労人だと思う。

「ああ、それで、この男がいかにしてストーカーになったかって話だっただけ？」

優香は箸で遊佐さんを指す。いや、ストーカーって違うよね？

「ストーカーじゃねえ」

「あれは停学くらう前でしたね」

「何で、てめえがそこまで知ってたんだよ？」

遊佐さん、それは愚問です。優香さんは無敵の情報ハンターです。何知ってても不思議じゃあないんです。

「“星高の白い虎”ともあろう人が、一目惚れした女に会いたいがために停学に耐え、会いたい一心で毎日学校に来る。何とも涙ぐま

しい話ですねー」

優香の言葉はとってもわざとらしい。遊佐さんは眉間に皺寄ってるし。

「それ、マジかよ?」

「へえ、そうだったんだ?」

天真君と南城先輩が遊佐さんを見る。

「うるせえ、どうだっていいだろ」

「でも、私、遊佐さんのこと見た記憶ないよ?」

当時からこんな金髪だったら知ってるような気もするんだけどな

……

「単に擦れ違っただけだし、当時、楓はある映画に夢中で、熱心にその話をしてたから、完全に眼中になし」

とある映画って何だったっけ?

大体、天真君が優香に熱く語ってるけど……

「遊佐君、君は意外にロマンティストなのかもしれないね」

「そうなんですか? 遊佐さん」

南城先輩が笑って、私は遊佐さんに確認してみるけど、眉間の皺がより深くなったような気がする。

「……楓ちゃん。その遊佐さんっての卒業しねえ?」

「遊佐さんは遊佐さんですよ?」

一体、何のことだろう。遊佐さんは遊佐さんなのに。

「だって、俺ら、付き合ってたんだし」

「え、そうなんですか!？」

あれ？　そういえば、さっきもそんなこと言ってたっけ？  
寝耳に水なんですけど！  
思い返してもそういうやりとりがなかった。

「そうなの？　天真君」

「俺に聞くんじゃないよ」

天真君がちよつと不機嫌になった。

でも、天真君はある意味立会人なんだし……

「俺に熱い想いをぶつけてきたんだ。そりゃあ、つまり、そういうことだろう？」

遊佐さんが当然のように言った。

そ、そりゃあ、なりゆきで告白しちゃったし、遊佐さんも好きだ  
って言ってくれたけど、付き合ってた単語はなかったし。

「嫌なのかよ？」

「嫌じゃないです!」

嫌なわけがない。

「じゃあ、呼べんだろ、名前で」

それとこれとは別の問題だと言いたい。  
急には無理というか、照れるというか、優香の視線が怖いという  
か……

「遊佐君、君、ちょっと図々しくないかな？ 君より付き合いの長い僕でさえ未だによそよそしい呼び方されてるのにさ。結城も白河もずるいよね」

南城先輩、何か怖いです。名前で、とは言われてたけど、でも、南城先輩ともそんなに親しいわけじゃあ……ないですよね？

だって、天真君は幼なじみだし、寧々子先輩は……何でだろう？

「まあ、テストで結果出さない限り誰も認めないでしょうねえ？ 結城さん」

「意味ありげに俺を見るな、瀬山」

また優香と天真君の間には微妙な空気。ちょっと怖い。

「テストなんか邪魔されてたまるかよ！ んなもん、楽勝だ！」

「あ、言いましたね？ 赤点、ダメですからね？」

にいつと優香が笑った。乗せられたら負けなのに……

「一緒に勉強しましょうね！」

こうなったら、それしかない。私も勉強する！

そう決意したものの、結局、真面目なテスト勉強の仕方もわからない私がどうにかできるわけもなく、あの極悪優等生カップルを頼

ることになったのは言うまでも……違った。言いたくないことである。

遊佐さんは赤点こそ回避したけど、本当にギリギリで、勉強の日々が待ち構えてた。

でも、私達はいつの間にか認められて、周囲からバカップルと言われるまでになってしまったわけで……

まあ、これが平和で、幸せ、なのかな？

## エピローグ（後書き）

これにて、純情ロールケーキ完結です。

いずれ番外編なんかも書きたいなあと思いつつ、同じ高校を舞台にしたオムニバスの一つとして考えていた話なので、他の話もその内書きたいです。

星高の正式名称が何なのか、とか（出してないことに今気付いたなんて言えない）フルーツの名前の女の子とか、猫様の活躍とか…ではでは、ここまで読んで下さりありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3823w/>

---

純情ロールケーキ

2011年10月9日21時40分発行